
全世界の力を手に入れる方法論

齋藤尚彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全世界の力を手に入れる方法論

【Nコード】

N0563Z

【作者名】

齋藤尚彦

【あらすじ】

人はなぜ死んでいくのだろうか？

誰も僕の周りにはいなくなっていく。

そして僕は一人、空間で遊んでいた。

何気なくあれから10年後の執筆(前書き)

あれから10年…

何気なくあれから10年後の執筆

明日もこんな感じで過ぎていくと思うと、腹立たしさを覚える。

たまには、喫茶店でも行きたいが誰も仲間はいない。

僕は常に一人で10年間を過ごしてきた。

仕事はしていたが大して稼ぎはなかった。

なぜならあまりにも僕は大した人間ではなかったからだ。

それは僕が、自分を常に隠す癖がついていたせいもあったからだろ
う。

どうしても僕はこのとにかく自信がなく、不安げな性格のトラウマ
が理解出来ずにいたし

そんなの理解させてくれるような人がいるようなものなら、むやみに
イメージの中でボコボコにしていたかもしれない。

しかし、僕のその尻拭いは自分ですることは事実であった。

そんな中ときは2011年を回って2012年に変わる節目だった。

僕はなぜか29歳の頃召喚を覚えてしまった。

その理屈はどうでもいい。

ある人はそれを殺気のように感じ取り

ある人はその空間に入ることを選んだ。

だから僕の存在は常に周りの人から一目置かれる存在だった。

が僕はいつも何故か馬鹿にされていた。

それが僕の業だったからだろう。

どうでもいいことに僕はいつもこの仕事を何か不思議に思っていた。

僕はそれでお金をもらうわけではないが、

常にそれを気にとめていた。

それは召喚を使いありとあらゆる、試しをしてみることだった。

この事はあとから色々僕に、副収入をももたらしてくれたりもした。

その能力をひと通り書き記す事にする。

それは、白魔術と召喚魔法、時空魔法の話である。

やはりこの魔法群はこの世に存在しうるのだった。

なんだろうか？と思われるだろうが…

これは誰にでも使えるものでもない…

とも言い切れない???

が誰もまだ伝授はしていない。

一人だけこの方法をすべて話したいと思っていたのだが…

だれも、この魔法を理解しようとはしないし、だれかに話そうものなら

前者の通り僕は変人あつかいされていただろう。

だから世の中などほっておいて僕はひとりでこの魔法を使いこなすことだけに

専念していた。

クルシユナムルティは言っていた。

心理的時間空間は存在しないと。

全ては物理空間のみでのみ存在しうると。

しかし、それは提言だったろう。

僕はこう思う。

こう言わなければこの科学の繁栄する世界において皆彼のことを変人あつかいしていたにすぎない。

だから僕はあえて言う彼も心理的時間空間の持ち主であったのだらう。

というより使い手だったのだらう。

あらゆる人はこうだろうか。

人は人間関係の中でのみ個々の個性を作り上げる。
すなわち人間関係や社会との接点の中でのみ、
人間という形を作っけていけるのだと。

それに異を唱えるのが心理的時間空間だとする。

その理由は、時間を無限としてしまうこの力だ。

人間が生きていく上で何が必要なのかは自ずと見えてくるだろう。

果たして僕はそんなくだらない気が付きをとうにみんな済ませてい
ると

思って10年間を過ごしてしまった。

しかし誰一人僕のレベルに到達している人は周りにいなく…

くだらない茶番的な宗教家の系に操られているレベルの人間の
世界にいるという僕のその存在に気がついてしまって。

僕は思った。

どうしようもない…

この世の中だったと…

そう、そのレベルだった…

いまだ世界は…

1章「始まり」

あれは何年か？

僕はある日何食わぬ顔で歩く一人の男性を見つけた。

彼はなぜか僕に対して何か話しているように思った。

それは、不思議な出会いだった。

そろそろ僕も19になるう時だった。

もう青春も終わりか？と思う自分に

なぜかもう少し何かあるような雰囲気を持っていながら

僕はもうこの歳で可能性も何も無いと思ったいた。

それも10年後も常に同じだった。

この若さで何もかもつまらなく感じるような何か

不安感も感じつつ人生にさしたる期待も持たず。

この歳を過ごしていた。

それが不況がやってきたこの僕の青春時代だった。

世の中は常に激動の日々で先進国はすべてもう終わりだとさえ思ったりもした。

それが今の僕にはやはり同じに思えた。

その人はこういった。

何か不思議な人だった。

狂っているのでは？と思うほど不思議なことばかりつぶやいたりもした。

この歳僕は不思議な人とはかり出くわすことになった。

あるその一人は僕にいろいろなことを教えたが1つだけ自分を見失うなよと言いつつ残して僕の前から消えてしまった。

すごい人だったのは覚えている。

その人は何千人の教え子を持っていると言っていた。

それはどうでもいいことだった。

その人は何千人の顔を見つめてきたということがよりすごいと思った。

その人は高校生の塾の先生だったという話だ。

その人は僕のことをこういった。

君はなぜここにいるのだね？

君が来ることを僕は知っていたのだが…

ある意味君は勿体無い… 大学に行きたまえ…
とிட்டた。

最後に別れ際に、自分を見失うなと言いつ残した。

もう一人はひろといい彼は僕にいろいろ不思議な技を見せた。

彼は何かを使うと僕は思っていたのだがそれが何かわからないまま
僕は

彼から姿を消してしまったのだった。

この歳すごいレベルの人に出くわすことが多々あったのだが
最終的に僕はそのレベルに達することになった。

それがなんなのか？

ようやくわかった。

霊的世界？

といつか、何だろう？

不思議な世界だった。

ともあれ、彼らは今どこに住んでいるのか？
さえ僕にはつかめない。

ところでもう一人の人がいた。

彼は将棋をしたとき僕にわざとばんをヒックリ返したのだ、
ありとあらゆるいちやもんをつけてきたユニークな人だったが…
かれの凄さもまた凄まじかった。

しかし彼の強さはその何かの気迫のような絶対的自信と事実だった。
なぜか負けるといふ言葉が彼にはないように思われた。

もう一人は、不思議な人で落ち着きと大人の雰囲気とすごい筋肉の
鎧のような体を
した男だった。

その人は僕らのもとから一番にいなくなってしまったが。

もう一人僕を友達と呼ぶ人もいた。

彼は僕に何気なく話しかけてきた。

僕は彼の誕生日を一発で言い当ててみた。

その時はなぜか言い当てて見たかったのだ。

それがあたってしまって彼は驚いていた。

そしてもし最初に買ったCDを教えてくれたら嬉しいといったので
僕は言った。

レッド・ツェッペリンのCDだと僕が話すと
彼の目が少し輝いた。

そして僕は、彼に僕の数字的な秘密を教えてみせたとき、彼はまたそれに驚き、僕に色々近づいてきた。

その時の僕はなぜかつまらないことに思えたがもう少し、僕も何かきっかけさえあればまともなストーリーを人生において歩めると思っていたのだが。

僕はここで人生を棒に振ってしまう結果になったのだった。

たぶん彼らも、ある意味力をそぎ落とされてしまっているだろう。

この世界の覇者になるべき存在を消す何かの組織に…

2章「その後」

僕はある意味危険な身だった。

それは、その存在だった。

僕は何かいつも常に誰かの存在を感じていた。

それは危険を及ぼす存在だった。

それは、僕のことを常にチェックしていると思っていた。

そう、その組織だった。

僕はそれを無視できなかった。

だからそれを、10年間何か判明させるためにただぼーっとして過
ごしてもいた。

しかし世界の運命を変えられないように僕は自分の運命も変えられ
なかった。

世界にリーダーが存在するように何かの力がないとこの世界は代わ
りほしないと
それが示していたように。

そうだった。それは常に僕に何かを訴えかけていた。

そうだった。

僕は10年後気がついた。

あそこの中で何かかもみ消され10年間にわたりまたその組織が牛
耳り続けるために？

今、その力たちは封印されていたのだらうということ。

ぼくは、晴れて10年後それを完全に復活させることに成功した。

そしてそれとともに、安定も取り戻しつつあった。

3章「力を手に入れる旅」

僕は何かのために力を手に入れなくてはという衝動と
もうどうしようもない、世界のそのつまらなさを感じて生きていた。

それが25歳ぐらいの時代だった。

どうしようもなく喧嘩もし、
常に不安を感じていた。

そして組織に対する絶対的な何かの恐怖をいだいてそれに従っていた。

そう、何かの組織か？それはわからないが…

僕はあらゆる存在を否定し続けていた。

親や兄弟それらさえも信じられずにいた時代：
19歳。

そして何もかもの下に敷かれ自信を失いボロボロになっていた25歳。

そして最後に29歳から、前向きに生きていくことを選択した時代。

そして力を手にしだした30代

そして今、僕は完全なる魔法を手に入れた。

その魔法を手にし、
僕は何もすることを失ったようにさえ思っていた。

そして僕は日雇いという仕事をするようになっていた。

世界は不況とパニックのどん底だった。

僕は、何か自分のその自信のなさとかくだらないという思いと
何もかもを気がついていながらそれに対して誰もが
常に発信さえしない時代だという
この何かに常に不安を抱いていた。

誰もが真実を語らず誰もが
真実に気付こうとさえすれば気がつける時代だった。

僕はそれに常に戦っていた。

そしてもう世紀も終わりを告げる時だった。

僕はもう、この話はしてもいいと思った。

そしてその口を割ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563z/>

全世界の力を手に入れる方法論

2011年12月2日01時53分発行